

「中国報」(中国レポート 第十号)

おすすめ書籍 (番外編)

～中国を日本との歴史関係で理解するための書～：おすすめの中国関連書籍情報

「反日」中国の文明史 平野聡著 ちくま新書

新型コロナウイルス感染症のパンデミックのため、すでに2年以上中国へ出張することができなくなっています。中国はゼロコロナ政策を取り、入境者に対して14日間の隔離とプラスアルファの経過観察期間を設けているため、実質的に出張ベースで中国への入国は不可能となっています。本来出張で見聞きした興味深いリアル中国の内容を報告するのがこのレポートの趣旨でしたが、興味を引くような書籍があれば本レポートでご紹介させていただいています。これまでは新刊書を中心に紹介してきましたが、今回は2014年に出版された書籍をご紹介します。

「日清戦争の衝撃と勝海舟の予言」としてインターネット上に明治大学の加藤徹先生が、清末の中国と日本 — 今も終わらない「長い20世紀」という資料を公開されている。

<https://www.isc.meiji.ac.jp/~katotoru/20210521.html>

その中で勝海舟の日清戦争に対する批評(氷川清話)が引用されているが、実に示唆に富んだ指摘だと恐れ入る。その趣旨は大体以下のようなものである。

「日清戦争に勝ったと世間は喜んでいるが、中国人は皇帝が代わろうが、敵国に国を取られようが平気だ。国家の興亡など象の体を蚊か虻が刺すくらいにしか感じない。日本人が勝ったなどと威張っていると後で大変な目に合う。鉄砲の戦争に勝っても、経済戦争に負けると国は立ち行かない。この経済戦争にかけては、日本人はとて中国人には及ばないのだ。」

120年ほどの時が経過した今日の日中の経済的立ち位置を予言しているのではないかと感じてしまう。

閑話休題

『「反日」中国の文明史』は、古代の中国から現代に至るまでの歴史を軸に、そのところどころに日本がどのように関係するのかを思想・文化を含むポイントが簡潔に解説されている。書籍名に「反日」という文字が先頭に掲げられているので、「嫌中本」ではないかという印象を持ってしまいが、おそらく本書が出版されたのが2014年の7月なので、2012年9月の尖閣の国有化を起点とした反日の嵐が吹き荒れ、13年末には首相の靖国参拝が行われるなど、両国関係が最悪の状態で執筆・出版されたため、書籍のタイトルがこの様になったのではないかと推察されるほど、中身は「中国の反日」を取り上げたものではなく、中国と日本との関係を簡潔に説明するものである。

取り上げられている内容をキーワード的にいくつか羅列すると

中国夢、夏と夷狄、儒学、朝貢関係(冊封関係)、宋学(朱子学)、易姓革命、陽明学、洋務、中体西用 琉球処分 小中華思想 対華21カ条要求 明治維新、脱亜論、日清戦争、日露戦争、抗日の源流、中国共産党の誕生、国民党と共産党、毛沢東と新しき村、農村戸籍、毛沢東独裁、大躍進、文化大革命、改革開放、六四天安門事件、南巡講話、中国の特色ある社会主義、愛国主義教育。尖閣問題、歴史決議、愛国主義教育、打黒運動、中華民族の偉大な復興、などなど内容はかなり豊富である。ここで上げたキーワードは、いわゆる世界史用語集などで説明

されているその事象を単独で解説しているものではないので、その背景を理解しやすい。電子書籍も出版されているので、キーワードから検索して読むというようなことも可能であろう。

「和」と「武」の関係から易姓革命とはいかなるものかについての説明の箇所を見てみる。ちょっと長くなるが、関連する部分を引用する。

『和という漢字を生んだ中国文明の文脈では、和の表す状態は、あくまで儒学の理想が実現した状態であり、中国文明が立ち返って確認すべき根本を意味する。現実の中国は決して調和ある社会ではなく、常に争いが絶えない。そもそも夏・殷・周といった古代王朝以来、中国文明の歴史は武力による政権奪取をはじめ、数え切れないほどの騒乱に満ちている。騒乱が起こるという事は、儒学が目指す調和が掻き乱された状態を意味する。では「それは決して許されない、いかなる不満があっても下の者は上下関係を守らなければならない」と考えるべきなのか、答えは否である。

社会の乱れの根本は君主が天理をわきまえず、自ら世の乱れを放置したという不徳によるからである。そのような君主はすでに君主としての資格、命を失っているので武装氾濫で排除されるのは当然ではないか。したがって反乱を起こした人間は失敗する限り反逆者であるが、反逆の成功自体、天命が自らの側にあることを示す何よりの証拠であり、その瞬間から反乱の指導者は新たな聖人君子となる。正しい乱は許されるし、天の意思にかなう。このような反逆の過程と論理を易姓革命という。中国文明の歴史が「華夏」と「夷狄」、徳のあるものと徳が失われたものとの間の争奪戦の歴史となるにつれ、権力の座にあるものはいっそう、ある誘惑にとられる。自分はどれだけ徳があり、上下関係の頂点たる、天子=皇帝（天子は天に対する、皇帝は下々に対する名称）にふさわしいかを、天地万物（とりわけ人類一般）に広く知らしめなければならない。そのためには、具体的な儀礼をとりおこない、下のものを満足させなければならない。もっとも、より率直に言えば、現実には「華夏」の力が弱く、「夷狄」の全てに理想の政治を及ぼし得ないことの方が常である。しかも「夷狄」には様々な集団があり、「華夏」の輝きに対して何の憧れも抱かず、内外ともに乱れた状態の荒々しく恐るべき存在もいる（やがて中国文明から見て、その最たる存在は日本となっていく）。』

要するに、易姓革命の思想は、「徳のある者に天命が下され易姓革命を起こしうる」というのは徳川の幕藩体制にとって非常に物騒な思想であるし、一方で禁裏が事実上武家に政治の実権を明け渡しつつも「万世一系」を続けてきた日本にとって、特に江戸時代の間は危険な思想を抱く大国とはほとんど交渉を持たずに、時を積み重ねてきたことになる。

本書で取り上げている岳飛のエピソードに対する評価も興味深い。

『宋はまず北方騎馬民族の国家・金によって滅び、南へ逃れた南宋は首都、臨安（杭州のこと）の名の通りにつかの間生き延びた。その宰相であった秦檜は南宋の安定のため金と和議したが、その際に金への抵抗を唱える武将・岳飛を忙殺してしまった。岳飛の姿を悼む後世の人々は岳飛廟を建て、漢人国家の大義を裏切った秦檜については、縛られ跪かされた像におとしめて唾を浴びせ続けた。「中華」に殉じた岳飛のなんと輝かしく、裏切り者の末路のなんと無様なことであろうか。』の部分である。しかしながら、現在の中国の領域（領土）を守り、多民族国家を守ろうとする人は、このように考えてはならないと筆者はいう。

『なぜなら、かつて宋を南に追いやった金の末裔・女真人は、後に満州（マンジュ）人と自称を改めて清を建国し、「中国」史上空前の領域を作り上げ、近現代中国にその「恩恵」をもたらしたからである。中共・中国政府の主張によれば、現に漢族も満族（満州人）も、同じ中国公民として共存し協力している。昔の歴史を掘り返して敵対心を煽る事は、単に民族問題をこじらせるのみならず、追いやられた立場の満族の故郷である東北三省を祖国中華から切り離し、日本やロシアの草刈場にしてしまうことを意味する（現に清末にはそうなりかけた）。したがって今や、宋と金の不幸な関係は、多民族国家・中国が今日に至る過程での緊張の一幕に過ぎず、それは漢人社会の内部における混乱と同列にして考えるべきなのだという。こうして現在の中華人民共和国では、「中華の正統」へのこだわりゆえに岳飛を「民族英雄」と呼ぶ事

は厳しく禁じられ、岳飛廟で秦檜に唾を吐くこともご法度となっている。』という。秦檜に唾を吐くことを禁じているのは、あちらこちらに唾を吐く人が多い中国で、このような行為は「非文明的な行為だから、エチケットを守りましょう」という表層的な解釈をしては、本質を見誤るとのことなのだ。

最後に、以下の2つの部分を本書から引用・紹介する（一部主語を省いて引用してある）。

『ボス政治の恐ろしさは、その頂点に君臨する人間に本当に人徳や実力があるかどうか分からないにもかかわらず、利益目当てに平身低頭し群がる人々を前にして、自分こそ本当に人徳があると思いこんでしまうことである。これこそすなわち道徳政治の本質である。自らの強権とボス政治を批判する人々を逮捕・暗殺し、いつの間にか周囲にはイエスマンしかいなくなった。そこで逆に、自分は四分五裂の中国を徳ある強権によって救いうる唯一の人物であり、皇帝に即位するのにふさわしいと思い込み、自分を皇帝に推戴するような世論工作を進めた』

『現在の中国は、平等な社会とは程遠い。今や徹底的な民主化・自由化を望む人々がおおり、あるいは今すぐそこまで行かなくても、法治の徹底と民衆の政治参加の拡大によって、共産党員や公安等権力の野放図なやり方に制約をかけることを望む人々（新公民運動）が一方にいる。

その一方、新左派と呼ばれる人々が急激に台頭し、貧しく苦しくとも平等だった毛沢東の時代のほうがまだマシであったと主張する。しかも、野心的な政治家が彼らを動員して恐怖政治まがいの反汚職キャンペーンを展開し、ライバルを打倒しようとしている。

低所得者向け住宅の建設や農民の都市移住推進（毛を賛美する革命歌を歌う運動）」を起こし、自らのイメージを毛沢東に重ね合わせた。こうして、自分とは誰も対抗できない雰囲気を作り出した上で、汚職への取り締まりを表看板としつつ敵対勢力をことごとく弾圧する「打黒運動」を起こし、多くのライバルを刑場に送った。』

最初の文章が袁世凱、その次の文章が薄熙来について本書で記述されたものだ。「歴史決議」で「功罪半分」と位置づけられた毛沢東なども含めて考えると、大なり小なりナンバー・ワンの地位に近づくと同じような行動をとるのかもしれない……。

(2021/10 森山博之)

本レポートに関する問い合わせ先：<https://arc.asahi-kasei.co.jp/contact/>